

天国への手紙 23年6月10日放送分

【ラジオネーム】長男坊

【タイトル】弟たち

2人の弟たち。お前たちが先に逝って、俺が最後まで残るとは思ってもみなかった。まず次男坊。お前が亡くなって今年で10年だ。

お前とは、子供のころからケンカばかりしていた。

お互い大人になって、さすがにケンカはしなくなったが、

それでも折り合いは悪いままだった。

親父に似て気が短く、不器用な俺と、

おふくろに似てお調子者で、それでいて勉強も出来たお前とは、

きつと「水と油」だったんだろう。

正直、若いころは兄弟の中で唯一大学へ行ったお前へのひがみもあった。

それでも10年前、お前の事故の知らせを聞いた時の、後ろから殴られたような衝撃と、その後の喪失感、今でも昨日のこのように思い出す。

そして三男坊。年子だった俺と次男坊から少し遅れて生まれたお前は、

誰に似たのかおっとりした性格で、俺と次男坊にとっては潤滑油のような存在だった。

おふくろの葬儀の時も、

お前がいてくれなかったら、葬儀がまとまらなかったかも知れない。

そんなお前が亡くなって3ヵ月。

次男坊に続いてお前まで、順番を守らずに先に逝ってしまうとは。

きつと、俺が先に逝けば、あの世で俺と次男坊がギクシャクするだろうから、

お前が先回りしてくれたんだろう。

何だか、俺のせいでお前が先に死んでしまったような気がして、

申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

おふくろの四十九日を終えた夜、お前の旗振り、三人で飲みに行ったな。

ちびちび飲みながら、会話といえば、子どもの頃の思い出話が少しと、

おつまみの味の感想を語り合ったくらいだったけど、

何だかとても尊い時間を過ごしているような気がした。

お代は俺持ちだったけど、

あのとき初めて、お前たちに長男らしいことをしてやった気がする。

俺がそつちに行ったら、また3人で飲みに行こう。

(終)

リクエスト ジョン・コルトレーン「マイ・フェイバリット・シングス」

※3人で飲みに行ったとき、会話がふと途切れた瞬間、この曲がかかっていました。